



横井勝彦 教授



連合駿台会報

No.306 平成24年11月15日発行
 編集・発行 連合駿台会
 広報委員長 齋藤柳光
 〒101-0052 千代田区神田小川町三一二二
 明治大学「紫紺館」内
 電話 (〇三三) 三二九六一四七四七
 FAX (〇三三) 三二九六一四七四八
 印刷 有限会社 美 創

連合駿台会九月例会

「戦略広報と初年次教育」

明治大学商学部長 横井勝彦教授

連合駿台会平成二十四年九月の例会を、九月二十日(木)十二時より、明治大学「紫紺会」四階会議室で、横井勝彦商学部長らをゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、山口政廣会長から次のような挨拶がありました(挨拶主旨)。

八月三日に大学の新施設の見学会を行い、猛暑日にもかかわらず、五十人を超す参加者がお集まり下さったことに感謝申しあげます。また九月八日・九日には全国校友静岡大会があり、大学側からもの理事長・学長をはじめ教職員の方々が多数参加され、総勢千二百人以上の出席者があった。地方の大会でこれだけの人が集まるのは大変なことであり、大学は元気に邁進していると思っております。

昨年十一月のロシアのメドベージェフ大統領(当時)の北方領土視察に始まり、今年に入ってから八月には韓国の李明博大統領が竹島(韓国名・独島)に上陸、最近では尖閣諸島問題を巡る中国との確執……と、国内が民主党・自民党の代表選を控えている中で、国際的にもたいへん難しい問題を抱えている。中国のネットを見ると、日中の主力兵器、たとえば戦車や戦闘機、ロケットの射程距離、レーダーの感知距離などの比較が写真や図入りで載ったり、中国解放軍の将軍十人の発言が掲載されるなど、非常に緊張感が高まっている。こういう中で、わが国は国際世論をうまく味方につけることが重要だと思う。日本では比較的、宗教上の問題も少なく、一時はヒモ付きなどと批判された経済援助も、今ではスムーズに行われるようになっており、国際評価も高いので、これをもっと利用しない手はないかと思う。

連合駿台会の運営については、十月中旬に今期第一回目の正副会長会議を開催予定、運営委員会(委員長会)については過去二回開催しているが、今後も隔月(偶数月)で開催していく予定をしている。そこで今後のあり方、会員の増強、会費、予算の問題などを多角的に議論していただき、方向付けしていきたいと思っております。皆様にもますますのご協力をお願いしたい。

当日の講演の要旨は以下の通りです。

※

これが商学部シリーズ

明大商学部では、これが商学部シリーズと銘打って、この三年間に三冊の書籍を同文館出版より刊行してきた。ここではまず、この既刊の三冊と後続の二冊の概要、そして、全五巻シリーズの目的について紹介したい。

第一巻『新版 これが商学部!!』(二〇一〇年刊、全二百五十頁、千五百円)は、第一部で商学部の教育内容を講義形式(一限目〜九限目)で、イラストや図表を交えて解説し、第二部では学生七人の留学体験記と海外協定校四校からのメッセージを紹介し、最後に第三部では商学部のOG・OB六人から受験生へのメッセージを掲載している。この本は、受験生を対象に「商学部の最新事情―入口から出口まで―」を分かり易く解説することを目指した(販売部数六千五百部)。



第一巻



第二巻



第三巻

第二巻『社会に飛び出す学生たち―地域・産学連携の文系モデル―』(二〇一一年刊、全二百三十四頁、千七百円)は、神奈川県三浦市、東京都の大田区と浅草、長野県飯田市、鳥取市、群馬県碓氷村等をフィールドとした地域連携、九州の水俣とラテンアメリカを拠点とした国際連携、そしてHONDAとJTB法人東京の協力を得た産学連携、これらを通して学生の「見える化」、つまり「社会が見える学生」「社会から見える学生」をいかに育成しているかを紹介した。ここでも主要な対象読者は受験生を考えた(販売部数二千部)。

第三巻『ビジネス研究の最前線』(二〇一二年刊、全二百三十八頁、千七百円)では、商学部の教員が「何を教えているか」ではなく「いま何を研究しているか」を高校生にも分かり易く(せめて六〜七割は読めば理解できるような)解説に努めた。もちろん、これ

は難題であるが、ファッション・ビジネス、日本人の心理と行動、ビジネス・ネットワーク、企業の社会的責任、グローバル・ビジネス、日本経済分析といった比較的身近なテーマから、先端的なビジネス研究について平易な解説を試みている(販売部数五千部)。

つづく第四巻『世界の大学のビジネス教育』は、二〇一二年度末の刊行を目指して、もっか商学部の教員総勢十名が奮闘中である。大学教育の国際化・グローバル化が叫ばれて久しく、いまや明大はその先導的大学としての役割を担いつつあるが、世界の大学でビジネス教育がどのように展開されているのかについては、意外に情報が乏しい。そこで、パリ、レンヌ、ブレイメン、ロンドン、ミシガン、シドニー、サンパウロ、ラプラタ、上海、大連など、世界各地の大学での取材をもとに、ビジネス教育の国際事情の解説を計画している。これは商学部を目指す高校

生への情報発信にとどまらず、教育研究の国際化に向けた学部改革の一環でもある。

最後の第五巻『ビジネスと教養(仮題)』は、二〇一三年度末の刊行を目指して、現在はその下地となるシンポジウムを開催しつつある。各章の構成(学内連続シンポのテーマ)は、次のように予定している。①商学部では「教養教育」をこう考える(二〇一二年十月開催済み)、②教養英語と実践英語―二者択一か統合か?、③海外の大学・大学院での教養教育とは?、④初年次産学協同(人材育成)教育の可能性、⑤国際交流の目的は「異文化理解」だけか?、⑥この関係をどう捉える…哲学・宗教・企業倫理、⑦ビジネスエリートには教養が必要!なぜか? 以上である。本来、大学の「入り口」で最も活発に行なわれなければならないはずの「教養教育」論議が、現状では国際化・情報化の陰に隠れてほぼ休止状態にある。この第五巻は、このような危機意識を内に秘めて、回顧的にドメスティックな議論ではなく、グローバルな視点から、広く問題提起を試みようという企画である。

全五巻出版企画の目的

さて、以上の〈これが商学部シリーズ〉全五巻の出版は、もともと次の四つの目的を持つ企画として考えられた。

第一の目的は、これを明大商学部の体系

的な学術発信媒体の主軸として位置づけることにある。いうまでもなく大学では多くの部署が毎年、膨大な量の印刷物を作成している。大学ガイド・学部ガイドはその代表例である。しかし、大学・学部の出版物が一般書籍として全国の書店に並ぶケースはきわめて少ない。今回の企画の第一目的は、学部としての一般書籍市場への進出(＝全国的情報発信)にある。

第二の目的は、これを新入生向け初年次教育の教材としても活用することにある。すでに二年前より明治高校との高大連携講座でも、商学部では第一巻をテキストとして使用しているが、学部一年次配当の「商学入門」(前期二単科目)で第一巻を、「商学研究入門」(後期二単科目)で第三巻を、それぞれテキストとして使用して、実際に執筆を担当した教員が中心となって、初年次教育を実施してきている。

第三の目的は、五巻すべての定期的な改訂により、商学部の教育・研究の成果を継続的に発信していくことにある。カリキュラム、社会連携、先端研究、国際連携、初年次産学協同(人材育成)教育など多方面におよぶ取り組み実績と議論の到達点を、定期的な改訂のなかで、できるだけ大きく反映(発信)して行くことを目指している。

第四の目的は、各巻の英語版(縮刷版)を

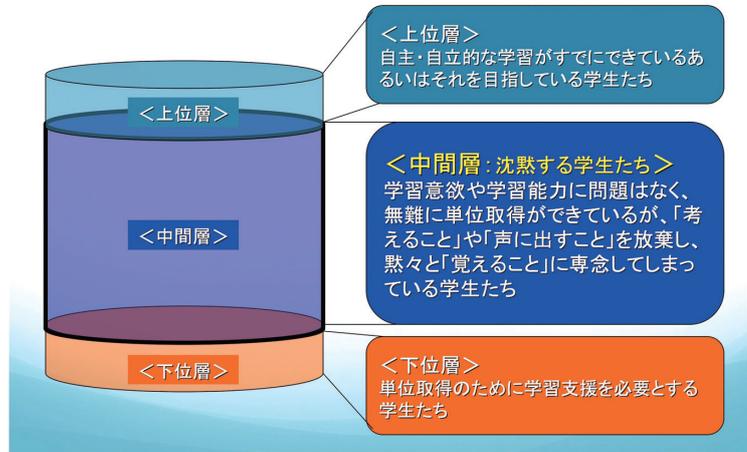
作成することによって、海外へも情報発信を広く展開することにある。商学部主催の国際シンポジウムに関しては、その成果を日英両言語併記のパンフレットに残してきているが、それに加えて、とりわけ既刊の第一巻(第三巻に関しては英語版の作成を急ぎ、海外協定校への情報発信にも積極的に努めていく。

戦略広報と初年次教育の融合

昨年三月の東日本大震災によって、本学でも入学式は取り止めとなり、新年度の授業も一ヵ月後の五月開始となった。この事態に対応して、商学部では四月初めに第一巻の『新版これが商学部!!』を新入生全員に届けて、一か月の自宅学習を促した。この自宅学習による初年次教育は、いったいどの程度の効果があったのか。その点については残念ながらいまだ確認できていない。

なお、明大商学部の一般入試での受験者総数は、全国の大学の商学部・経営学部の中でも最多で、一万六千人を上回っているが、この人氣に〈これが商学部シリーズ〉が戦略広報としての程度貢献しているか、この点も残念ながら確認できていない。〈これが商学部シリーズ〉の普及が受験生の増加に連動していれば、つまり受験生は受験業界の情報ではなく、学部が独自に発信する情報に基づいて自らの進路を主体的に選択してくれるならば、われわれの戦略広報の可能性、すなわ

圧倒的多数の沈黙する中間層



ち初年次教育に先行する受験生への情報発信の可能性はさらに拡大するのであるが、これはまだまだ今後の課題である。

ところで、商学部では二〇〇八年に「地域・産学連携による自主・自立型実践教育」の取組みが「質の高い大学教育推進プログラム（教育G P）」に採択された。以来四年間にわたって文科省からの助成を受けて、各種の「特別テーマ実践科目」を展開してきている。〈これが商学部シリーズ〉の第二巻『社会に飛び出す学生たち―地域・産学連携の文

系モデル』は、それらの成果報告である。そこでは、地域連携や産学連携を通じて提供される社会の教育力と学内の様々な教育支援体制を結合させることで、受動的な学習姿勢を示す「沈黙する圧倒的多数の学生たち」を「社会が見える学生」そして「社会から見えない学生」へと「見える化」していくことが目指された。

Future Skill Project 研究会

見えない存在である圧倒的多数の「沈黙する学生」を、思考と表現力を取り戻し、自主・自立した「見える学生」へと転換していくにはどうすれば良いのか。この「沈黙打破プロジェクト」は、ほとんどの大学にとっての共通課題であろう。

じつは、この課題は、学外においてもほぼ同じ時期から、本格的な議論が始まっていた。明治、青学、立教、上智、理科大の五大学と、アステラス製薬、サントリ、資生堂、日本オラクル、野村證券の5社から計十名が参加（明大からは横井が参加）して、ベネッセコーポレーションを事務局として、二〇一〇年にFuture Skill Project 研究会が設立された。「社会で活躍できる人材をどのように育成すべきか」、これが研究会のテーマである。研究会はすでに二年に及んでおり、昨年十一月に日経ホールで開催された「産学協同就業力育成シンポジウム」に続いて、本年も

十二月に明大のアカデミーホールにおいて、同様のシンポジウムが「企業』『大学』が協同し学びに関わることで学生の主体性は引き出されたか？」というテーマで開催される。

初年次教育としての産学協同講座

昨年と今年の二年間、上記の五大学では上記の五社の協力を得て、学部一年生を対象に実験授業が行なわれてきた。明大商学部においては、「産学協同就業力養成講座」という授業が開講された。募集定員は四十名、それを七グループに分けて、以下のような授業が展開される。企業からのゲストスピーカー（テーマ企業A）によって課題が提示されて、各グループは懸命にそれに取組む。最終発表会（第八回目）での企業側の講評はきわめて辛い。しかし、それに打ちのめされることなく、学生たちは第十回目から二社目（テーマ企業B）の課題に取組む。これまでのところ脱落者は一人も出ていない。ちなみに、今年度の課題は、資生堂が「『シリーズ』の更なる拡大に向けた戦略」、アステラス製薬が「二〇〇五年の合併当時に戻ったのコーポレートブランド戦略」であった。

このように初年次教育として、産学協同講座を五大学が企業の協力を得て一斉に開始した背景には、それなりの共通認識があった。第一に、学生の主体性を引き出すには、入学時の意欲が高い時期が重要であること、

商学部総合講座A 「産学協同就業力育成講座」

(和泉・前期2単位：講師 樋渡雅幸)

- 第1回 授業オリエンテーション (講座の目的)
- 第2回 ビジネス (社会) を意識した大学生としての学び方 (グループ分け)
- 第3回 ビジネス (社会) を意識した大学生としての学び方 (マナー)
- 第4回 テーマ企業A 〈1〉 (ゲストスピーカーからの事例説明、情報収集)
- 第5回 テーマ企業A 〈2〉 (中間発表会に向けたディスカッション)
- 第6回 テーマ企業A 〈3〉 (ゲストへの中間発表会)
- 第7回 テーマ企業A 〈4〉 (最終発表会に向けたディスカッション)
- 第8回 テーマ企業A 〈5〉 (最終発表会とゲストからの講評)
- 第9回 プレゼンテーションの振り返りと今後の対応
- 第10回 テーマ企業B 〈1〉 (ゲストスピーカーからの事例説明、情報収集)
- 第11回 テーマ企業B 〈2〉 (中間発表会に向けたディスカッション)
- 第12回 テーマ企業B 〈3〉 (ゲストへの中間発表会)
- 第13回 テーマ企業B 〈4〉 (最終発表会に向けたディスカッション)
- 第14回 テーマ企業B 〈5〉 (最終発表会とゲストからの講評)
- 第15回 本授業のまとめ

第二に、「リアルな企業事例」から実際の社会に対する理解や興味を高めることが有効であること、そして第三に、初年次に社会で必要とされる能力・スキルを知り、大学での学びを目的化させることが重要である、というものである。

主体性やコミュニケーション能力の涵養の重要性は言われて久しい。商学部が二〇〇八年から実施した「沈黙打破プログラム」〔地域・産学連携による自主・自立型実践教育〕にしても、同じ課題意識に基づいている。〈これが商学部シリーズ〉の中でも多く

の学生が登場して、その重要性を自ら証明してくれているのであるが、今回の「産学協同就業力育成講座」は、複数の大学が同時に取り組んでおり、しかも各大学の取り組みに複数の企業が協力している点など、これまでの産学連携講座とはいくつもの点で大きく異なっている。

こうした新たな特徴がマスコミの関心を呼び、この夏、TBSのニュースで二度、計五十分近くにわたって取り上げられた。今後は、校友も含め学内でこの取り組みへの関心が広がっていくことを期待したい。以上

◆広報委員会からのご案内(理事会議事録)

日時…平成二十四年九月二十日(木)十二時
場所…明治大学「紫紺館」(二F会議室)

○新推薦会員承認の件

丸山委員長から、入会薦書が提出されている徳丸平太郎氏、谷田貝敦男氏、吉田英範氏、若林紀生氏、湯本良太郎氏、水澤元博氏、椎名茂樹氏の七名について、組織・会員増強委員会では入会を承認したという報告があり、全員異議なく承認された。

○新井顧問、副会長就任の件

前明治大学評議員会議長の新井久晴氏は、今年度五月の総会で顧問ということになったが、改めて副会長に戻っていただくことになっている、という報告があった(詳細は山口会長より)。

昨年末に交通事故を起こされ、新役員の人選の頃(三〜四月)にはまだ回復されていなかった。そのために負担の少ない顧問をお願いしたが、その後目覚ましく回復されたので、これまでの経験を生かしていただきたいと思い、ご本人にご意向を諮ったところ快諾を得たので、本日、理事会でご承認いただきましたと思う。

これに関しては、全員一致で承認された。

○各委員長よりの報告事項

委員長の連絡会議にあたる運営委員会（第二回）が九月十一日に開催されたので、報告事項がある委員長から、委員会報告をしてもらうことになった。

〈広報委員会 齋藤委員長〉

連合駿台会の「ご案内」の最新版（資料に同封）ができあがった。狙いとしては積極的に会員増強のために使えるパンフレットとしている。ホームページもデザインを一部新しく変えて制作中なので、パンフレットにはURLをきちんと入れ、メールアドレスも「mailto」を使い、外から誰でもアクセスできるようにした。ホームページは現在、一ページだけが新しいものになっているが、近々、パンフレットの内容を取り入れて、情報を増やしていきたいと思っている。

〈財務委員会 谷委員長〉

現在の会員は四百五十七名だが、うち休会者が百十三名で、実質会員数は三百四十四名である。その中で退会・休会等会費未納の方が二十七名いて、本年度会費納入見込み会員数は三百十七名。八月末現在で既納入者数は二百二十六名で、九十一名が未納である。本年度の収入予算は千六百五十万円だが、現在のところは千五十六万円で、今後見込まれる収入を昨年の同時期の納入実績に基づき算出したところ百八十五万七千円で、合わせて

も千二百四十万七千円で、およそ四百万円が赤字になる計算である。

したがって今後、この赤字を解消するため、どうするかという問題が残る。直近の課題としては、①この会の目的は、大学の発展への寄与、大学との連携の強化が第一だが、大学支援委員会の予算は年々増えているのが現実なので、もう少し抑え、新規事業に関しては様子見にしたい。②例会の費用が、会費収入に対して二百万円ほどの赤字になっている。ということは、講師料が大きすぎるという指摘もあるので、これは総務・事業委員会にも考えていただきたい。また中長期的課題としては、組織・会員増強委員会のご尽力で新入会員は増えているが、現実の年会費収入は増えていない。毎年、退会者や未納者が増えていくということを考えると、会員にとって魅力ある会にするため、アンケートなどをとり、そのポイントをまとめて五つくらいに絞って、それをみんなで実行していきたい。大学への連携強化、大学発展への寄与とともに、会員にとっての魅力ある会への認識を新たにしたい。また休会の規定がはっきりしていないので、規約をきちんとしたうえで、休会員の対処を考えていきたい。

〈大学支援委員会 舟橋委員長〉

今年度当初、大学支援委員会の年間予算は約六百万円ということで組んだが、少し見

直すようにとの指摘が財務委員長からあったので、現在それに向けて、関係方面と折衝中である。

またキャリア教育支援を積極的に進めようとしており、本日の講師・横井商学部長からも説明があると思うが、是非とも皆様にもご協力いただきたい。

〈総務・事業委員会 河村副委員長〉

財務委員会のご指摘もあつたので、委員会では例会の講師謝礼等の四百五十万円の支出を費用対効果で詰められるか、あるいは考え直すか否かを検討している最中である。

〈組織・会員増強委員会 丸山委員長〉

お願いが二つある。第一に、今ちょうど、第二次の会員増強の活動に入るところで、昨日、約六十名の方に新しくできたパンフレットを送付したので、理事の方々には、今まで同様、お知り合いの方を推薦いただきたい。第二に、谷委員長からもご指摘があつたが、ここ一年間入会していただいた方の出席率があまりよくない。委員会でも努力はするつもりだが、ご推薦いただいた方は、新入会員に積極的にプッシュして、出席してくださるようご尽力いただきたい。一年くらい経つと出席も定着してくると思うので、そのあたりを皆様にお願したい。

〈専務理事〉

かつて当会の運営費用の大部分は、運営益

を使っていた。しかし最近では運営益がほぼゼロなので、会員の会費を使って当会の運営をすることになるので、どういう活動をどれくらい予算で行うかということ、各委員会活動を定める前段階で話し合いをすべきだと思っている。したがって、来年度の予算委員会はそういう方法で行いたいと考えている。

以上

◆新入会員ご紹介

前会までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。(敬称略・到着順)



谷田貝 敦男
昭和三十四年・政経学部卒
富士通(株)・執行役員
千葉県千葉市在住



若林 紀生
昭和四十二年・商学部卒
新生紙パルプ商事(株)
代表取締役社長
東京都中央区在住



椎名 茂樹
昭和三十五年・政経学部卒
元千葉港運倉庫(株)代表取締役副社長
千葉県千葉市在住



古田 英範
昭和三十七年・工学部卒
富士通(株)・執行役員
神奈川県横浜市在住



徳丸 平太郎
昭和四十六年・経営学部卒
徳丸織物(株)・代表取締役
埼玉県蕨市在住



湯本 良太郎
平成十四年・商学部卒
国際警備(株)・営業顧問
東京都大田区在住

◆計報

会員の植松寛氏(昭和三十年・商学部卒、株金城商會取締役社長)が、平成二十四年十月十五日に逝去されました。享年八十歳。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

◆明大ニュース

●文科省公募プログラムに三件が採択

文部科学省が公募する「国公立立大学を通じた大学教育改革の支援」のプログラムに

本学から申請した以下三件の取り組みが採択された。

- ①「国際機関等との連携による「国際協力人材」育成プログラム」取組責任者：副学長・長尾進(国際日本学部教授)、②「日本AS E ANリテラシーを重視した実務型リーダー育成プログラム」取組責任者：副学長・勝悦子(政治経済学部教授)、③「グローバル人材育成推進事業」取組責任者：副学長・勝悦子(政治経済学部教授)

●二〇二二年度九月卒業式を挙行

二〇二二年度明治大学九月卒業式が九月十九日、駿河台キャンパス・リバイテイルホールで挙行され、秋空の下、キャンパスを巣立つ二百一人(学部百七十三人、大学院二十八人)の門出を祝った。

●二〇二二年度九月入学式

二〇二二年度明治大学九月入学式が九月十九日、駿河台キャンパス・岸本辰雄ホールで挙行され、国際日本学部五人、各大学院四十人(理工学研究科一人、ガバナンス研究科二十二人、グローバル・ビジネス研究科十七人)が新たに明治大学の門をくぐった。学部・大学院の合同による九月入学式が行われるのは初めて。

●全国校友静岡大会を開催

明治大学校友会（向殿政男会長）は第四十八回全国校友静岡大会を九月九日、「来てくりよう霊峰不二とお茶の里駿府へ」と銘打ち、静岡市グランシップで開催。全国および海外から千二百人あまりの校友とその家族が参加した。

●司法試験に八十二人が合格

法務省は九月十一日、法科大学院修了者などを対象とした二〇一二年司法試験の合格者二千二百二人を発表した。合格者は二〇〇六年に始まった新試験では過去最多となり昨年比三十九人増だった。明治大学からの合格者は八十二人（昨年は九十人）だった。総受験者数八千三百八十七人に対する合格率は二五・一％（昨年は二一・六ポイント増）で新試験の導入後、初めて上昇に転じた。

●大学生観光まちづくりコンテスト二〇一二

政治経済学部の市川宏雄ゼミナール（都市政策）の学生グループが、大学生を対象とした観光まちづくりコンテスト二〇一二で、最優秀賞（観光庁長官賞）を受賞した。

●オープンキャンパス 過去最高に

二〇一三年度入試に向けた「明治大学オープンキャンパス二〇一二」が、駿河台・生

田・和泉の三キャンパスでの全七回の開催が終了し、合計で過去最高の五万四千六百九十八人（前年比三千七百五十一人増）の高校生らが、この夏に明治大学を体感した。

●OB社長

▽（株）東京証券取引所（証券） 〓 岩熊博之氏（一九七六年商学部卒・六十歳、一三年一月一日就任予定）

▽新菱冷熱工業（株）（建設） 〓 加賀美猛氏（一九九三年政経経済学部卒・四十三歳、十二月二十五日就任予定）

▽イーピーエス（株）（サービス業） 〓 田代伸郎氏（一九七八年農学部卒・五十七歳）

●OB市長・町長

▽千葉県富津市長（九月三十日投開票）
佐久間清治氏（無所属③、一九六八年法学部卒・六十六歳）

▽神奈川県箱根町長（十月二十八日投開票）
山口昇士氏（無所属④、一九六七年商学部卒・六十八歳）

●法学部 国際化の推進へ

法学部は夏季休暇中の八月十二日から九月十一日までの一カ月間、イギリス・ケンブリッジ大学で「ケンブリッジ大学夏期法学研修」を実施した。二〇一〇年に始まり三回目

の実施となる今年度は、二年生二十五人、三年生五人の計三十人の法学部生が参加し、伝統あるコーパス・クリスティカレッジでの授業と学生生活を経験した。

●三創立者出身地、鯖江・天童・鳥取で

学生派遣プログラム
社会連携機構（機構長 〓 藤江昌嗣副学長、経営学部教授）は、創立者出身地三地域で、学生と地域の人々の交流と連携を通じて、地域活性化への提言を行う学生派遣プログラムを開始した。

●研究・知財戦略機構

「ガスハイドレート」記者会見

明治大学研究・知財戦略機構などは十月二十九日、「日本海とオホーツク海におけるガスハイドレートの分布に関する最新の調査結果」について、共同記者会見を駿河台キャンパスで開催。日本海とオホーツク海の広い海域で、新たなエネルギー資源としての可能性を秘めた「ガスハイドレート」の回収に成功したことを明らかにした。

◆第十五回ホームカミングデー

我等が母校に四千百四十一人

明治大学が校友の皆さまをあたたくお迎えする「第十五回ホームカミングデー」が

十月二十一日、駿河台キャンパスで開催され、四千四百四十一人の校友や家族らが来場した。

●「進路指導教諭が勧める大学」でも第一位

この夏に大学通信が全国の進学校で進路指導担当を務める教諭に行った「進路指導教諭が勧める大学アンケート」で、明治大学が第一位となった。

●最古級の考古学資料から今を知る

明治大学博物館は十月十二日、特別展「氷河時代のヒト・環境・文化」のオープニングセレモニーを駿河台キャンパス・アカデミーコモン地下一階の博物館エントランスホールで挙行した。セレモニーには、日高憲三理事長、風間信隆博物館長はじめ各関係者が参列し特別展の開幕を祝した（十二月十二日まで、十時～十七時、入場料三百円）。

●学生対抗！ 第二回eプレゼンコンテスト

ユビキタスカレッジ運営委員会は十月三日、「学生対抗！第二回eプレゼンコンテスト」の表彰式を駿河台キャンパス・アカデミーコモンで開催した。このコンテストは、本学のユビキタス教育を下支えし、eラーニングや遠隔教育といった新しい教育方法を発展・定着させるべく企画されたもので、昨年に続き二回目の開催となる。

●ホームカミングデー校友会企画 特別講演「明大競走部 充実の時」

正月の風物詩「箱根駅伝」まで約二カ月と迫った十月二十一日、ホームカミングデー行事の一環として、校友会が企画した特別講演「明大競走部 充実の時」もはや古豪ではない！ 確かに見える六十四年ぶりのVロード」が開催され、二百人以上のファンや校友らが会場に詰めかけた。

●紫紺NET 企業リーダー講演会を初開催

校友会は十月十一日、全ての明大校友のための交流サイト「紫紺NET」のグループを中心として、駿河台キャンパスでセブン銀行代表取締役会長の安斎隆氏を招き「新銀行十二年―金融の原点を忠実に」をテーマに講演会を初めて開催。リーダー論も交えた安斎氏の講演に約二百三十人が聞き入った。

●「フランス企業フォーラム」初開催

就職キャリア支援部は、在日フランス商工会議所（CCIFJ）と共催で十月十八日、駿河台キャンパス・アカデミーコモン二階で、今回が初めてとなる「第一回フランス企業フォーラム2012」を開催した。

●創立者出身地・福井県鯖江市長らが来訪

福井県鯖江市の牧野百男市長、野村一榮

鯖江商工会議所会頭らが、十月二十三日、駿河台キャンパスを訪問し、福宮賢一学長、藤江昌嗣副学長、須田努地域推進連携センター長と懇談した。

●第六回お茶の水JAZZ祭を開催

明治大学による地域連携の一環として、秋の恒例行事となった「第六回お茶の水JAZZ祭」が十月七日、駿河台キャンパス・アカデミーホールで開催され、第一線で活躍するアーティストたちのパフォーマンスを約千人の聴衆が堪能した。

●二〇一二多摩区三大学コンサートに参加

明治大学は十月十三日、「多摩区・三大学連携協議会」の活動の一環として、川崎市多摩市民館ホールで行われた「二〇一二多摩区三大学コンサート」水と緑と学びのまち」に参加した。

●杉並「福祉会館まつり」に

和泉ボランティアセンター初参加

明治大学和泉ボランティアセンターは十月十三日、杉並障害者福祉会館（東京都杉並区）で開催された「第三十一回福祉会館まつり」（十月十三～十四日開催）に初参加し、学生たちの協力のもと、会場内で「ゲームコーナー」を運営。親子連れや障がいを持つ

た方々など約百五十人が来場し、ゲームやイベントを楽しんでいた。

●特定非営利活動法人「桜ライン311」

東日本大震災で二千人以上が犠牲となった岩手県陸前高田市の津波到達点上に桜を植樹し、震災を後世に伝えることを目的とする特定非営利活動法人「桜ライン311」は、十月六日、明治大学震災復興支援センターとの共催で、「二〇一一年度活動報告会in東京」を駿河台キャンパスにて開催。約八十人の来場者を前に、関係者が講演や活動報告を行った。

●拉致問題解決に祈りを込め

横田夫妻が講演会・写真展を開催

明治大学は十月十八日、川崎市との共催で、北朝鮮による拉致被害者家族である横田滋さん・早紀江さんの講演会を生田キャンパスで開催し、約百五十人の市民と学生が集まった。

●六大学野球秋季リーグ戦四位で終える

体育会硬式野球部は十月二十八日、神宮球場にて二〇一二年東京六大学秋季リーグの全日程を終了。法大に連勝することが優勝への必須条件だったが、明大は勝ち点を挙げられず四位でシーズンを終えた。この悔しさをバネに来季の雪辱に期待したい。

●ドラフト二〇一二 上本内野手が広島三位

二〇一二年プロ野球新人選手選択会議が十月二十五日に行われ、硬式野球部の上本崇司(商4)が広島東洋カープから三位指名された。これで、明治大学からは三年連続でプロ野球選手が誕生した。

◆九月例会出席者

青柳勝栄、秋山隆敬、坏昭二、浅倉晴司、有賀隆治、飯塚佳央、池田勝也、石川かおり、石原裕司、上西紘治、宇川一夫、宇敷和章、打出満、内田八郎、大石哲也、大竹夏夫、大牟田伸洋、大村託現、大山卓良、金子圭太、荻部彰夫、同ご友人、河村博、清野明男、日下豊顕、小柴和弘、兒玉圭司、小山修、根田吉雄、斉藤春夫、斉藤弘之、齋藤柳光、坂本孝行、佐藤健、眞田瞳、志田憲彦、甚野捷、杉浦伸二、鈴木勝利、鈴木紘一、鈴木隆志、園田英次、高見真一、武内裕、武田宣夫、田代恭一、谷慈義、田村駿、長岡信裕、中川敏洋、長見茂、中村豊、二宮充子、二宮忠、野口昌宏、橋口隆二、長谷川勝彌、長谷川進一、原田榮、樋口郁夫、日高憲三、平川清、福田和彦、富士豊、藤代耕一、藤巻伴英、舟橋達彦、前川一郎、松崎優子、同ご友人、丸山律夫、宗近博邦、村岡健、安河内究、山口政廣、山田朝彦、山田幸夫、義江邦夫、吉村國廣、渡辺紀之

【編集後記】

十月に連合駿台会の公式ホームページをリニューアル公開いたしました。連合駿台会の歩みや組織の紹介、活動内容の報告のほか、会報もPDFでご覧いただけます。会員はもとより、明治大学のOB、校友の皆様にも連合駿台会を広く知っていただく有効な手段と考え、入会のご案内も掲載しました。若年会員が増えて会が活性化されればと期待しております。今後は、広報委員会にて継続的にホームページを維持・管理していく所存です。さらなる企画等、より充実したホームページに改善していきたいと思えますので、忌憚のないご意見をお聞かせいただければ幸甚に存じます。まずは一度アクセスしてみてください。URLを直接入力、連合駿台会を検索するほか、明治大学のホームページから「卒業生の方」をクリックしてもアクセス可能です。(http://rengosundairai.jp)

最近パソコンよりタブレット端末の販売が優勢といえます。いつでもどこでも情報を得る事ができる時代になりました。このような状況下、マイクロソフトが新OSを発表し、パソコン市場の巻き返しを図ろうとしています。今後技術は日進月歩で進化し、状況は刻一刻と変化していくことでしょう。利用者である我々は、技術・情報に踊らされることなく、情報の真贋、有益性を見極める眼を持って活用していかねばなりません。デジタル・ネイティブといわれる子供たちが育っている現在、数学的・論理的な分析力をもった人材の育成は、大学の責務ともいえます。明治大学の「文理融合」教育に期待したいところです。

(藤巻 伴英)